

歯科開業医の談話室

- 01 上顎無歯顎印象採得
- 02 下顎無歯顎印象採得
- 03 日本人用無歯顎既製トレー
- 04 総義歯の難症例
- 05 クラスプと間接維持装置の配置
- 06 直接維持装置の設計
- 07 間接維持装置の設計
- 08 鉤歯の歯冠形態改造
- 09 大連結子の設計
- 10 根尖まで根管充填する方法
- 11 感染根管のプレパレーション
- 12 歯内療法用器具の操作方法
- 13 歯内療法器具の根管破折防止
- 14 下顎孔伝達麻酔方法
- 15 歯科医師のための患者情報書類の書き方
- 16 半調節性咬合器の模型マウント方法
- 17 咬合理論
- 18 顎関節症

19 咬合病

- 20 変形性顎関節症
- 21 外側翼突筋の障害
- 22 円板後部組織の障害
- 23 中心位
- 24 中心位の採得方法
- 25 不正咬合
- 26 咬合分析
- 27 咬合調整
- 28 咬合調整のための診察・診断
- 29 咬合調整の方法
- 30 咬合調整の症例
- 31 咬合平面
- 32 咬合高径の理論
- 33 スマイルデザイン
- 34 アンテリアガイダンス
- 35 ロングセントリック
- 36 ブラキシズム
- 37 顎関節の雑音
- 38 オクルーザルスプリント
- 39 理想咬合

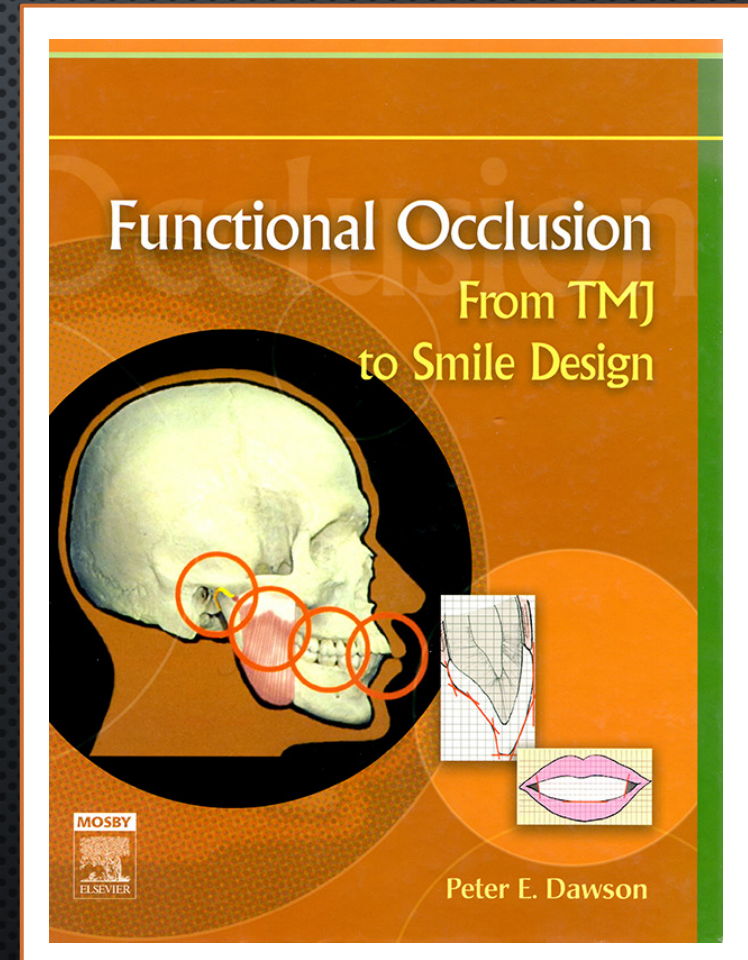


この談話室の記事に関係する著書を紹介します。
いずれもシエン社およびアマゾンにて購入できます。

咬合病

もくじ

1. 咬合病の定義
2. 歯科医師の責任
3. 咬合病とは
4. 咬合病の診察と診断
5. 咬合病の否定診断
6. 咬合病に含まれる病気

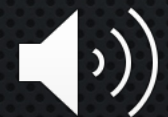
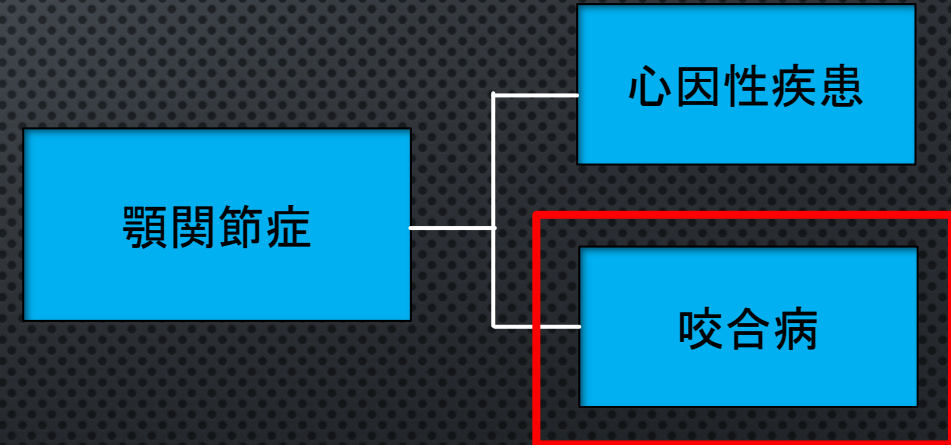


咬合病

1. 咬合病の定義

Guichetは、「咬合病とは、咬合不調和により促進される病的過程の総和である」と定義しております。日本補綴歯科学会は「咬合病とは、早期接触などの咬合の不調和に起因する顎口腔機能異常によりもたらされる種々の病態の総称である」と定義しております。

以上のことから、咬合病は顎関節症のうち不正咬合により引き起こされている疾患群と考えられ、咬合病には複数の病気が含まれております。

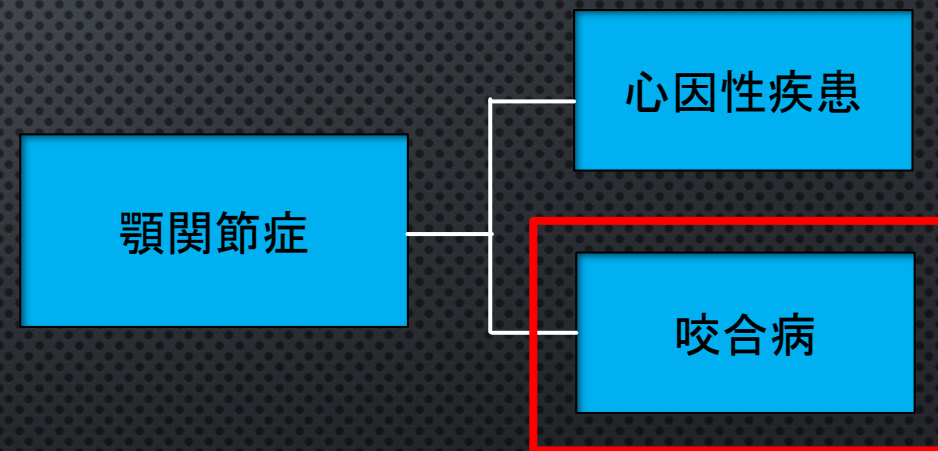


咬合病

2. 歯科医師の責任

咬合病は、機能的不正咬合に起因する疾患群です。咬合病には、咀嚼筋と顎関節を構成する器官の疾患が含まれておりますが、その他に不正咬合により引き起こされた歯の疾患すなわち垂直吸収が著しい歯周疾患や強い知覚過敏を伴う歯の破折もその範疇に入ります。

咬合病の原因は不正咬合にあることから、他診療科の医師あるいは整体師が診断と治療を行うことは不可能です。すなわち、咬合病の診断と治療は歯科医師のみが担当することになります。言い換えると、歯科医師は咬合病の診断と治療に関して全責任を担う立場にあるのです。

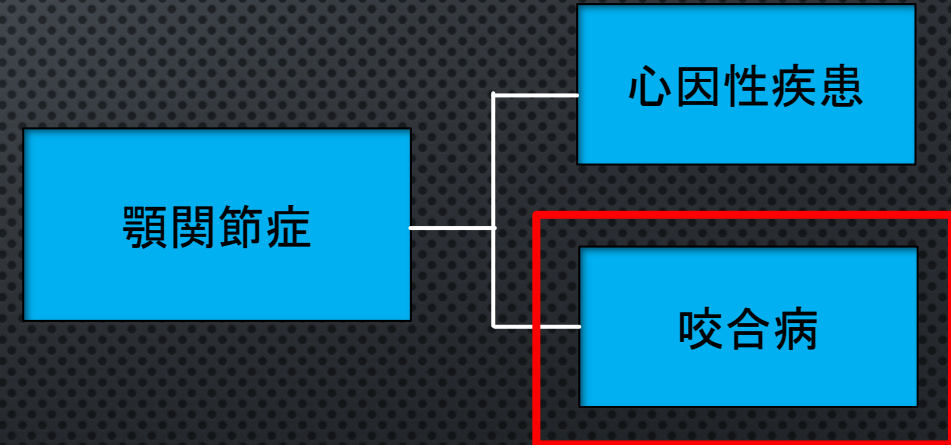


咬合病

3. 咬合病とは

咬合病は、機能的不正咬合により引き起こされる病気の集団名称です。咬合病には、咀嚼筋と顎関節を構成する器官の疾患が含まれております。

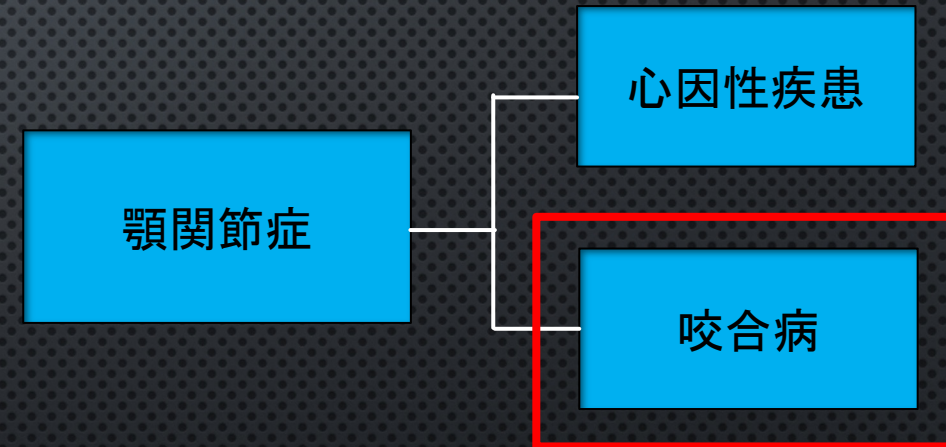
咬合病の主な症状には、「顎関節とその周囲の痛みや違和感」「開口障害」「顎を動かしたときの痛みや雑音」「頭痛」「めまい」などがあります。また、咬合病の症状には、軽度な違和感から死んだ方がましと思うほどの強烈な痛みまで存在します。したがって、それらが同じ病気とは考えられません。症状の多様性からも、咬合病には、障害を受けている器官と病態が異なる複数の病気が含まれていると考えるのが妥当です。



咬合病

4. 咬合病の診察と診断

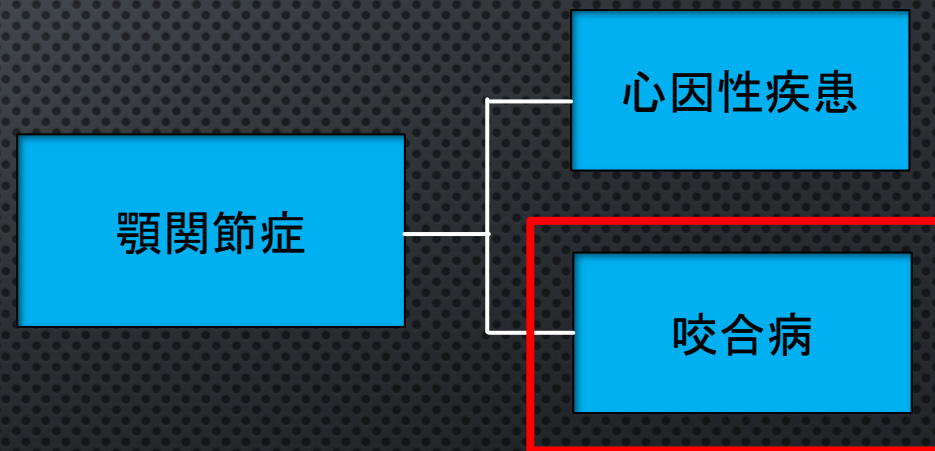
患者さんに咬合病が疑われた場合、問診など様々な診察を含む咬合分析を行います。咬合分析により、機能的不正咬合の有無と部位、病態を確認することができます。機能的不正咬合が存在した場合、その不正咬合が患者さんの咬合病の原因であるかどうかを調べます。患者さんの咬合病の原因が機能的不正咬合であることが確認された場合、その機能的不正咬合の解消を図る原因療法を計画します。その結果、患者さんの診断が確定します。歯科医師は、診断結果と治療方針を患者さんに説明し、了解を得た上で咬合病の治療を開始することになります。



咬合病

5. 咬合病の否定診断

咬合分析は、咬合病と間違われやすい他疾患に冒されている患者さんにおいても必要です。その理由は、患者さんの咬合が正常であることを示すことにより、咬合病と誤診して咬合病の治療を施すという間違いを防ぐこととなります。さらに、否定診断の結果から得た情報は、患者さんを適切な診療科に紹介する際の重要な根拠となります。



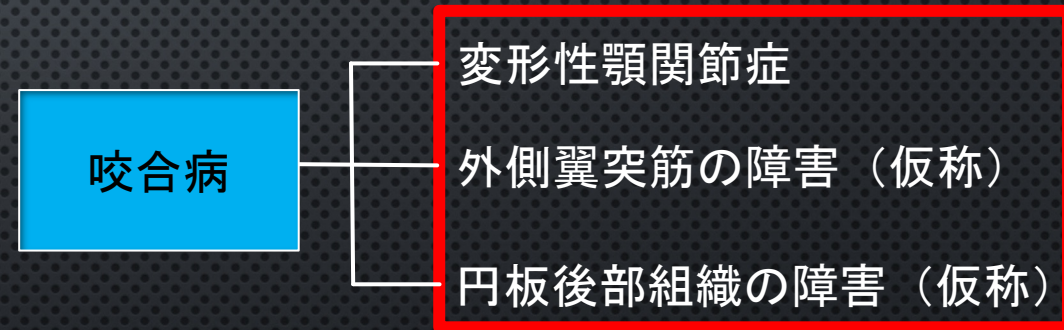
咬合病

6. 咬合病に含まれる病気

DawsonのFunctional Occlusionにおいて、咬合病のうち病態が明らかにされた病気として「変形性顎関節症」「外側翼突筋の障害(仮称)」「円板後部組織の障害(仮称)」が登場します。

「変形性顎関節症」は、下顎を強く繰り返し動かすことにより、関節円板などが退行性変性を起こした状態です。「外側翼突筋の障害」は、下顎を水平方向に動かすすぎることにより生じた外側翼突筋の疲労状態です。咬合病のうち大部分がこの病気とされております。「円板後部組織の障害」は「関節円板前方転位」とも呼ばれ、不正咬合により下顎が後方に動き、下顎頭が関節円板を後方で支えている円板後部組織を圧迫して、同部が障害を受けた状態です。

これらの病気については、後ほど詳しく解説します。



【歯科開業医の談話室 19】

咬合病

参考文献

- 1)保母須弥也:咬合学事典、書林、東京、1979.
- 2)Peter E. Dawson : Functional Occlusion From TMJ to Smile Design, MOSBY, St. Louis, 2007.
- 3)外川正:入門顎関節症治療のための咬合分析と診断, 金原出版, 東京, 2009.
- 4)外川正, 武田泰典, 加藤貞文, 阿部 隆, 千葉健一, 水間謙三, 岡田 弘:いわゆる「顎関節症」から分離して扱うべき疾患—とくに隣接医科との整合性を考慮して—, 日本歯科評論, 624:171~180, 1994.
- 5)Niles F. Guichet : Occlusion, Anaheim, Calif. , 1977.
- 6)最新医学大辞典, 医歯薬出版, 東京, 1987.
- 7)福井次矢:内科診断学第2版、医学書院、東京、2008.
- 8)Okeson JP : Long-term treatment of disk-interference disorders of the TMJ with anterior repositioning occlusal splints. J Prosthet Dent 1988 ; 60 : 611-616.
- 9)Dawson PE : Bad advice from flawed research. AGD Impact April : 30-31, 1995.

今回のテーマを気に入っていただければ👍をクリックしてください。
質問あるいは疑問がある方は、下の公開コメント欄にお書き下さい。
よろしければチャンネル登録をお願いいたします。

次回の項目は、歯科開業医の談話室20番目「変形性顎関節症」です。



その他の著書

